

ねずみ男の屍体凌辱空想とFreud, S. の解釈の方向性に関する一考察

富松 良介

はじめに—ねずみ男症例の裂け目

Freud, S.の五大症例のなかで、ねずみ男(Rattenmann)は Freud, S.直筆の分析記録が唯一現存する症例である。分析は1907年10月1日に開始され、この予備面接から1908年1月20日までの約4ヶ月間に亘る47セッションの分析記録が残されている(実際の治療期間は約1年とされる)。1907年10月30日、Freud, S.はウィーン精神分析協会において早くもこの症例報告を行い、後にも4回提出した。ねずみ男が広く周知されたのは1908年4月26日、ザルクブルク開催の第一回国際精神分析大会においてであり、Freud, S.の本症例発表はフロアからの熱望もあって4時間近く続けられたと言われる(Jones 1961)。翌年1909年、『強迫神経症の一症例に関する考察』と題された、病歴報告と理論的研究の二部から成る症例論文が出版される。症例論文では予備面接と7回目までの導入期セッションが順に記述され、以降の分析は回を追っての報告が省略されて断片的に織り込まれた。分析記録の方は、1955年にStrachey, J.による標準版英訳で初公刊され、次いで1977年にフランスのHawelka, E. R.による独文・仏文対訳が出され、さらに1986年にカナダのMahony, P. J.の調査研究によりエルンスト・ランツァーErnst Lanzer というねずみ男の本名、来歴や家族背景等が詳らかにされた。独語全集版の補遺巻へ本記録が収められたのは1987年に至ってからである(以下、症例論文を『考察』、分析記録を『記録』と略称する)。

『記録』の公刊と相俟って1950年代以降、本症例の歴大な再検討が重ねられてきた。Kanzer, M. (1952)は、Freud, S.による患者の言葉を補う態度や同性愛的満足を促す姿勢を、転移の問題として早くから指摘している。また母親との関係が殆ど分析されていない点については、Zettel, E. (1966)の指摘を嚆矢としながら、我が国の小此木(1977)がFreud, S.の逆転移や患者の投影同一視などの観点から緻密な再検討を行っている。北山(2001)は本症例のFreud, S.に対する従来の批判点を、母親との関係の見落とし、権威主義的態度や侵入的態度、治療関係の分析の不在、物のやりとり、患者との同一化などに整理しながら、しかしFreud, S.への批判に留まらず、当時の文化社会的背景を加味し、むしろ臨床的意義を積極的に見出そうとしている。またMahony, P. J. (2006)は、Freud, S.の浩瀚な文献を概観するよりも、本症例でFreud, S.が見落とした要素に取り組むことに、精神分析療法や理論的研究にとって新たに益するものがあると論じている。このように後世の分析家たちは、Freud, S.が『記録』に基づいて『考察』に何を書いたかという符合の検索よりも、「何を書かなかったか」という欠落に注目し、一方で批判を加え、他方で何らかの知を探ろうとし

てきたと言える。だが、どうしてねずみ男症例に向けられた幾多の眼差しは、そこにあるものより、あるはずのものがないという欠落の方へ奪われるのであろうか。

見た夢の内容に何らかの欠落があるとき、その想起不可能な空隙自体に夢見手の欲望が露わになるということ、Freud,S.は『夢判断』(1900)第6章C節で例証している。ある男性が、ある婦人と二人の娘が脱衣し裸になろうとする光景を夢に見る。だがその夢の続きにはやや欠落(Lücken)があり、その後、部屋から自分を追い出そうとする男と争う場面で夢は終わる。夢見手は、この夢の続きに「何かが欠けている」と語った。驚くべきことに、Freud,S.はこの夢の裂け目(Lücken)を「女性の性器」と解釈する。夢見手の男性は、女性にもペニスがあるという幼児の性理論から脱却できず、女性の性器のことを知りたくて堪らなかったのである。すなわち夢の裂け目と「何かが欠けている」という夢見手の言葉は、彼の欲望そのものを如実に示していたのである。

ねずみ男の分析における「構成 Konstruktio n」(GW7:426)のなかで、Freud,S.は患者が父親に折檻され、「お前なんかランプだ、ハンカチだ、お皿だ」と罵り返したという幼児期体験に遡る。これは患者の姉が死んだ頃の出来事と推測されたが、父の怒りを買うことになった原因は不明であった。そこで Freud,S.は患者の母親に問い合わせてみたが、確たる証言は得られず、折檻された原因については、幼き彼が誰かに噛みついたためらしいとの推測に留まった。この件に関連して、Freud,S.は『考察』の註へ次のように記している。

もし患者のこれに関する夢をより深く解釈すれば、母親と姉に対する性的欲望および姉の夭逝と、小さな主人公が父親から受けた折檻とを関係づけ、叙事詩作品の核心を明瞭に指摘できただろう。この空想に覆われた織物を一本一本解すことは失敗した。というのも、まさに治療の成功がここで障害となったからだ。患者は回復し、治療の継続と折合いの悪い、遅れを取っていた多くの生活上の課題に是が非でも着手せねばならなかった。ゆえに、分析のこうした裂け目(Lücke)について、誰も私を非難することはできまい(GW7:428)。

本症例には何かが欠けている、と Freud,S.はここで上の夢見手と似た言表をしている。Freud,S.は強迫症状に潜む患者の亡父に対するエディプス葛藤を中心に解釈したため、母と姉の「性と死」に纏わる空想を十分に探究できなかったのである。だが Freud,S.が叙事詩(本症例)の核心とまで呼ぶその空想の片鱗は、以下の『考察』の本文に示唆されている。

死の主題に対して、我々の患者は非常に特別な関係をもつ。彼はあらゆる人の死に心から同情し、敬虔なまでに葬式へ参列したので、きょうだいから嘲笑的に屍鳥(Leichenvogel)と呼ばれたほどである。彼は空想の中でいつも人々を殺したと思えば、外ではその遺族に対して哀悼の意を表した。彼が三歳から四歳の間に起こった姉の死は、彼の空想の中で大きな役割を演じ、その頃の幼児的な悪戯と密接に関連していた(GW7:451-452)。

患者は空想の中で人を殺し、また屍体(死者)に関心を抱き、屍鳥(カラス)と揶揄された。Freud,S.はこの無気味な空想に「死の主題」を指定し、患者の「姉の死」がそこに関連す

ると考えていた。だが、その織物(空想)には裂け目(Lücke)が残された。Freud,S.は治療成功の実績と引き換えに、この失敗を不問に付している。それでも後進がこれを瑕疵として非難するのは、Freud,S.の断じたように不当であろう。むしろこうした欠落に否応なく惹かれる我々の読みを、「何か欠けている」と言明する Freud,S.の欲望と、ねずみ男の性と死に塗れた女性に対する不断なる興味へと繋いで考察すべきだろう。Freud,S.はねずみ男の空想する屍体(死者)について、「何か欠けている」という印象を与える仕方で、それをどのように解釈したのか。我々はこの探究を通して、Freud,S.の性と死をめぐる解釈の特徴および精神分析におけるその理論的・歴史的・臨床的意義を検討すべきであると思われる。

以上の問題意識に基づき、本稿は、ねずみ男の屍体に纏わる空想とそれに対する Freud,S.の解釈の方向性について考察し、その精神分析的な意義を探究することを目的とする。その際、次の三つの観点から多角的に考察を行う。第一は『記録』における屍体凌辱空想の解釈の問題、第二はその空想に対する Freud,S.の逆転移と屍体への抵抗を示唆する解釈の仕方、第三は患者の強迫症状の起源について、屍体(死者)への負債感と金銭支払いの負債感の繋がりとという観点から、Freud,S.による解釈の特徴と絡めて検討したい。

ねずみ男症例の梗概

まず本症例の梗概をまとめ、議論の素材となる基礎資料を整理しておく。ねずみ男こと Ernst Lanzer は 1907 年 10 月 1 日、29 歳時に Freud,S.を訪ねた。中流階級ユダヤ人で法律学博士である彼の主訴は「愛する父親と女性の身に何事か起こりはしないか」との強迫観念であった(以下、ねずみ男を指す際は Lanzer または患者と表記する)。直接の来談動機は、同年夏の軍事演習中に大尉から聞かされた「ねずみ刑」の話題に端を発する強迫症状にあった。その刑が父と恋人に執行されるのではないかとこの恐怖が、ねずみから金への連想を経て、紛失した鼻眼鏡の立替え金支払いをめぐる強迫に発展する。その強迫に翻弄され、終いに訪ねた友人から医師の受診を勧められた Lanzer は、Freud,S.の『日常生活の精神病理学』を偶然読んでいた経験から、この分析家の診察室の扉を叩いたのである。

Lanzer は幼児期から女性の身体に興味を示し、その度に父への死の願望を抱いた。この願望は父から折檻される恐怖や禁止命令として回帰し、愛憎の両価的感情のなかで数々の強迫症状を形成した。だが来談時、既に Lanzer の父親は肺気腫で病死していた。Lanzer は亡父と同一化し、恋人関係や結婚選択上の心理的葛藤に陥った。また Freud,S.へ恭順を示す一方、叩かれる不安に脅えるなど転移感情を向け、分析家の母や娘にも空想を拡大させた。Lanzer のねずみ譫妄は強迫神経症の核に肛門性愛があること示唆したが、Freud,S.は父に追従するか違背するかというエディプス葛藤を分析の中心とした¹。分析開始から約 3 カ月で症状は軽快し、分析終了後の 1909 年、Lanzer は従妹 Gisela と婚約、翌年結婚する。法律事務所に勤め続けたが、1914 年 11 月、第一次世界大戦へ従軍し死亡した。

以下、Lanzer の屍体に纏わる空想を検討する際、本稿は『記録』を主たる素材とし、『考察』も適宜参照する。患者の屍体や死の観念に関わるエピソード、女性への性愛に関する語りなどを中心に、Freud,S.の記述や解釈と共に取り上げる。『記録』からの引用・参考の際には、北山監訳・高橋訳(2006)の邦訳版に従って頁数を記し、分析セッション番号を

#8,#10などと付す。また『記録』では患者や家族名が匿名化され、各版や『考察』の表記にも差があるため、本稿はMahony(1986)の調査で明らかとなった実名を用いる。主な家族や関係人物を整理しておく、Lanzerには両親のほか姉3人、弟1人、妹2人がおり、Lanzerが3歳の頃、悪性腫瘍により僅か9歳で夭逝した次姉Camillaと3歳下の妹Olgaが議論の中心となる。また従妹にして恋人でもあるGiselaも重要人物である。なお、これらの女性たちに加え、Freud,S.の母親もLanzerの性愛と死の観念に関係してくるだろう。

1. 屍体凌辱空想

Lanzerと屍体の関係を暗示する「屍鳥」の話は、#8の記録中、国家試験のための勉強と結婚の焦り、および恋人の祖母への怒りに関する話に挟まれて登場する。だが前後の文脈と屍鳥との繋がりには明確ではない。むしろ患者自身が屍体を仄めかす語りは#9で現れる。Lanzerはある女性と性交渉をしたという療養施設への再訪時に、同じ部屋を取った教授に対して立腹し、卒中してしまえとこぼす。2週間後、屍体の観念にうなされて目覚めると、翌朝その教授が卒中で倒れたと伝聞したという。Lanzerは自身の夢を重大なものと考え、頻繁にFreud,S.へ報告し、Freud,S.もまた夢を「彼の人生史のなかで重要な役割を果たし、まさに数々の危機Krisenをもたらしてきた」(p.60)と重視した(#13)。しかし、この屍体の夢(観念)の詳細は不明である。『考察』では、この逸話はLanzerの「思考の全能」と迷信的性格の問題として主に論じられ、同じく屍体観念の内容は示されず追究されていないⁱⁱⁱ。

だが分析が進むにつれ、屍体の影が見え隠れし始める。#13では、憧れていた女性の弟の葬式に居合わせるという過去に見た夢の詳細が語られ、屍鳥が長姉から呼ばれた渾名と分かる。#19でLanzerは病臥の従妹Giselaを眼前に、いつもこうして臥せていて欲しいと感じた経験を語る。従妹の「無防備な姿を見ていたい」(p.76)という彼の願望を、Freud,S.は「かつて彼が一度あえて意図的に思い描いてみた屍体凌辱の空想に、露骨な形で対応している」(p.76)と読む。ここが『記録』でFreud,S.が初めて屍体凌辱空想(Ph[antasi]e von Leichenschändung)という術語を用いた箇所である。だがFreud,S.はその直後に、「といっても、これは屍体そのものを眺めるという空想以上のものではなかったが」(p.76)と記して検討を切り上げる。Lanzerが一度意図的に思い描いたとFreud,S.の推測する時期とその観念内容は、『記録』を遡れば#9の屍体の夢(観念)に当たる可能性が高いが断定はできない。次の#20で、妹Olgaへ強引に迫った(凌辱)経験と性交の夢が語られた際、Freud,S.は当時のLanzerの年齢から、暴行が妹ではなく死んだ姉Camillaに及んだ可能性を推測する。だがFreud,S.はそれを屍体凌辱空想には直接結びつけず、「もし父が娘への暴行を知れば自分を折檻するだろう、そうなれば己は全能ゆえに怒りで父を死に至らしめるだろう」と患者の主訴に省略された観念内容を補い、むしろエディプス葛藤を構成している。

こうして分析初期を概観しただけでも、屍体はLanzerの夢、思考の全能、性格形成、父への死の願望やエディプス葛藤などFreud,S.の重視した主題群と密接に関わり、しかし決して前景化されない隠された結節点のように思われる。この謎に包まれた屍体凌辱空想の中身をテキストから剔抉することは難しい。だが、その空想が惹起された誘因と屍体に向けられたLanzerの眼差しとFreud,S.の解釈の仕方についての検討は可能かもしれない。

まず Freud,S. が Lanzer の屍体凌辱空想を連想したのは、従妹の無防備な(wehrlos)姿に向けられた彼の願望からである。『トーテムとタブー』(1913)で Freud,S. は、屍体への接触を忌避する原始社会の心性を論じた。死者(屍体)の恐怖は、愛する亡き人に対して生者の抱いた敵意(死の願望)が投射されて転じた感情であり、その敵意を意識化せず^{アンビヴァレンツ}に済む代償として生者は強迫自責に苦しむ。タブーはこの愛憎の両価的感情の標であり、強迫神経症の機制と通底しつつ、原父殺害に由来する近親相姦禁止とトーテム殺害禁止の掟を基礎づける。ゆえに死者(屍体)に纏わる禁止があれば背後にそれを侵犯せんとする欲望が潜む、というのが Freud,S. 理説の要諦である。では、なぜそもそも死者(屍体)がタブーの対象に選ばれるのか。その属性的要因を Freud,S. は端的にこう述べる。「死者は無防備(wehrlos)である。ゆえに死者に手を触れて敵意を孕んだ欲望を満足させることとなり、その誘惑には禁止を対置せざるをえない」(GW9:78)と。そして、この無防備さは他にも嬰兒や性的に成熟した女性にも共通し、それは誘惑を差し向ける刺激性を有するためであるとされる。

無意識的(原始的)思考のなかでは、死者(屍体)と女性は、禁止の侵犯へと誘惑する「無防備」という刺激において等価である。まさに従妹 Gisela は「性的に成熟した女性」であり、姉 Camilla は「屍体」として、この Freud,S 理論に符合する。彼女らへの性愛が父への死の願望と不可分であることが示すとおり、「女の裸を見んと欲せば、父は死なねばならぬ」(GW7:389)と Freud の翻訳した Lanzer の強迫恐怖は、「死者に触れんとすれば災厄が降りかかる」と信ずる原始社会の思考と等しい。Lanzer が無防備な従妹から性欲を刺激され、Freud,S. が屍体凌辱の侵犯を垣間見た経緯は、以上の観点から理解しうる。すなわち Lanzer は無防備な女性の背後に、いつも屍体の影を眼差しているのではあるまいか。

次に我々は、従妹へ向けられた Lanzer の願望について、Freud,S. が「これは屍体そのものを眺めるという空想以上のもではなかったが」と書いた一文を読み直す必要がある。凌辱ではなくこの眺めるということに Freud,S. が焦点を当て、にもかかわらず検討を切り上げたことに注目したい。というのも、Freud,S. が初めて精神的に屍体凌辱を扱った際の議論の流れと、『記録』における解釈の仕方が重なるからである。『性欲論三篇』(1905)の「性目標倒錯についての総論」のなかで、Freud,S. はこう書いている。

ある種の性目標倒錯は、内容的に正常なものから遥かに隔たっており、我々はそれを「病的」と説明せざるを得ない。特に性欲動が数々の抵抗(羞恥、嫌悪、戦慄、苦痛)を克服し、驚くべき行為(糞便を舐めること、屍体凌辱)を働くといった場合がそれである(GW5:60)。

倒錯の病理性について、Freud,S. はその内容よりも正常さとの関係や固着の程度等を考えるべきであると留保した上で、屍体凌辱(Leichenmißbrauch)の用語を括弧書きでその例に挙げたⁱⁱⁱ。だが『性欲論三篇』の全篇を通して、屍体凌辱への言及はこの総論の一箇所以外に見られない。倒錯としての屍体凌辱の追究を切り上げて、Freud,S. が論じるのは、眺めることの欲動論(瞻視欲)であり、それから向かった先は小児性愛の領域であった。

Freud,S. によれば、見ること(凝視や窺視)の快感が倒錯を形成するためには、その興味が性器へ局限され、嫌悪感が克服され、正常な性目標が抑圧されることが条件である。

Lanzer は家庭教師の性器に触れて以来、女性の身体を見たいという好奇心に囚われ(#1)、少女の裸体を覗き(#39)、従妹の美しい身体に惹かれた(#46)。Freud,S.は性器に触れさせるような誘惑を睽視欲の要因と認めつつ、むしろ幼児期の自発的な性愛表出(小児性愛)との関連を重んじた。性の区別の無視・出産の一孔仮説・性交のサディズム的解釈という三つの『幼児期の性理論』(1908)のうち、睽視欲は女性にもペニスがあると信ずる第一理論と関わる。すなわち女兒の性器に「何かが欠けている」という理論への反証が「ペニスがあるに違いない」と性器への睽視欲を必然的に生むとされる(知識欲の源にもなる)。Lanzer は便器で用を足す姉 Camilla の性器を見て、初めて性の違いに気付いた(#17)。つまり、今は亡き姉の何かを欠いた下半身を起源として、彼は睽視欲を開花させたのである^{iv}。

Freud,S.は Lanzer の中に「屍体そのものを眺めるという空想以上のもの」は追究せず、『性欲論三篇』における睽視欲から普遍的な小児性愛への流れと似た解釈を進めた。但し、女性の裸を眺めるだけで患者が勃起し満足した点について、「見る事が触ることの代わりになっている」(p127)とする解釈は注目できる(#42)。ここに睽視から接触へ、そして凌辱のサディズム的側面へ空想を展開する余地が残されている。だが Freud,S.の解釈は、凌辱から眺める行為へとその力点を移していく。すなわち Lanzer の分析において、死の問題を避けて性の問題を焦点化するという解釈の方向性が Freud,S.に見られるのである。

まるで原始社会の人々のように、Freud,S.は屍体に触れず、屍体(死者)を語ろうとする口を噤んでしまうのか。引用した『性欲論三篇』の一節に並ぶ羞恥・嫌悪・戦慄・苦痛という屍体凌辱に至るまでに克服すべき感情群は、その長い羅列自体があたかも Freud,S.の抵抗を物語るかのようである。したがって、次に探究すべきは Lanzer よりも Freud,S.自身の屍体への眼差しであり、そこに示唆される抵抗の起源についてであろう。

2. 逆転移—屍体への眼差しと Freud,S.の抵抗

姉 Camilla の死に関わる三つの記憶(寝台に運ばれる、父が部屋で泣いている、泣く母の上に父が身を屈めるという記憶)が Lanzer から語られたとき、Freud,S.は何かを失念した(#10)。後に Freud,S.は、それは「私の魂にかけて、あなたが死んだら、わたしも死ぬ」と姉 Camilla が Lanzer へ向けた言葉であったと想起し、この失念の原因が「私自身のコンプレックス」(p56)にあると綴っている(#11)。そのコンプレックスの内実は、『記録』では謎のままだが、死に関わる何かが分析家の逆転移を呼び覚ましたのは確かだろう。分析家自身の初恋相手と患者の恋人の名を取り違えた、有名な「Gisela Fluss!!!」の書き間違い(#21)が如実に物語るように、Freud,S.は患者の空想の渦へ否応なしに引き込まれていく。

#23 で Lanzer は無気味な想念を明かす。それは、裸になった Freud,S.の母親の胸脇へ二本の刀が突き刺さり、Freud,S.と子どもがその性器を喰い尽くすという想念であった。Freud,S.はこの転移想念の源を Lanzer の従妹の祖母に帰し、次のように意味を解釈した。Lanzer はその老婆の着替えを見て、肉体に興味を抱いたに違いない。その頃彼は、老齢でも美しさをいかに保てるかを示すため従姉が祖母の性器を剥き出しにする、という夢を見ている。また二本の刀は、結婚と性交を表している。ゆえに、この想念は「性交と出産によって一人の女性の美しさが尽き果ててしまう」(p.84)という禁欲的な観念と解される。

裸の母親が食られるという凄惨な情景に、たとえば小此木(1977)は口唇サディズムの食人的側面^{カニバリズム}を捉えており、我々も屍体凌辱空想をそこに認めるのは難くない。だが Freud,S. は己の母親に関する無気味な空想内容を、あくまで Lanzer の従妹の祖母に還元し、「陵辱された屍体」ではなく「美貌を失った女性」へとその眼差しを向ける。すなわち、Freud,S. の解釈は死(屍体)ではなく、性に対して焦点化されているのである。

それでも患者は追い打ちをかけるように、#24 で Freud,S. の母親の死ぬ夢を報告し、Freud,S. 夫妻の死児が現れるというイメージも語り、分析家に姉 Camilla の屍体を否応なしに想起させる。さらに#25 では Freud,S. の母親が絶望して立ち尽くし「彼女の子供がすべて吊るされている」(p.87)という想念まで語られる。つまり分析家自身(母親の息子)さえも屍体に化されるような想念に至り、終いに Freud,S. は「すさまじい転移で手がつけられない」(p87)とその狼狽ぶりを綴ることになる。なぜ Lanzer の転移空想は、分析家の逆転移をここまで擽るのか。この逆転移の糸をこれから手繰っていきたい。まず我々は『夢判断』第7章のよく知られた Freud,S. の夢に逢着するだろう。以下に、そのまま引用する。

私自身は数十年来、本当の不安夢を見ていない。だが七歳か八歳の頃、このような夢を見たのを覚えている。ほぼ三十年経ってから私はこの夢を分析した。夢は非常にはっきりとしていた。“お母さんが妙に静かで眠ったような顔つきで、二人(あるいは三人)の人に鳥の嘴に挟まれて部屋へ運ばれ、ベッドに横たえられる。”私は泣き叫びながら目覚め、両親の眠りを妨げた(GW2-3:589)。

この夢の鳥人間は、ハイタカ(Sperber)の頭を持つエジプトの神々と、性交を意味する野卑な言葉を初めて Freud,S. に教えた少年を連想させた。また母親の顔は、亡くなる数日前の昏睡状態にあった祖父の顔を連想させた。ゆえに夢は「母は死んでいる」と伝えているという。だが Freud,S. は、母親の死に対する恐怖ではなく、恐怖が性愛に帰されることをこの夢(不安夢)の本質と考えた。つまり、母親の屍体が静かに眼前で横臥しているにもかかわらず、Freud,S. の眼差しは、死よりも性に向けられている。

時を更に遡ること Freud,S. の幼年期、一家はフライベルクからウィーンへ移住する前にライプツィヒに一年間住んだ。そのライプツィヒ行きの汽車が駅で停車したとき、Freud,S. はガス灯の炎を見て地獄で燃える亡霊を連想した(Fliess 書簡 149)。またライプツィヒからウィーンへ向かう夜汽車のなかで、母親(matrem)の裸体(nudam)を見てリビドーが呼び覚まされたという(Fliess 書簡 141)。Freud,S. は前者の体験を3歳時、後者を2歳から2歳半頃と書いたが、Jones,E.(1961)は後者が4歳時の体験である事実を明らかにした。Gay,P.(1988)はこの記憶違いと matrem nudam というラテン語の使用について、4歳で母親にリビドーを感じたと認められず、その裸を生々しく母国語で表現するのを避けた Freud,S. の失錯と解する。だが本質は、母親への性愛の抑圧と抵抗よりも、母親の裸を見た記憶を亡霊の記憶の前に遷移させる無意識的操作の方に存するのではないか。Freud,S. は自身の汽車恐怖症の始まりを亡霊目撃体験に求めたにも関わらず、母親の裸と性愛を結ぶ体験をより古い起源へ位置づけた^{vi}。つまり我々が注目すべきは、死を起源から引き離

して性を代わりに置くという、その Freud,S.の無意識的操作の方向性である。

この死から性への解釈の方向性や無意識的操作の問題は、Freud,S.の神経症論にも影を落としている。『ヒステリーの病因について』(1896)の講演で、Freud,S.は二つのヒステリー嘔吐症例を俎上にあげた。誘惑をヒステリーの原因とみなし、その条件に「症状を決定づける適性」と「外傷力」を想定していた当時の Freud,S.は、傍証の第一に腐敗屍体を見たという症例を挙げる。この屍体の目撃体験は嘔吐症状を決定づけるための適性を満たすが、もしこれが鉄道事故に遭遇した場合ならばその適性は欠くという。次に「腐った果実」を食べたという嘔吐症例が挙げられる。この例では嘔吐と結びつく適性は認められるが、外傷力を欠くという。ここで Freud,S.は、ヒステリー嘔吐の症状を形成する上で適性を欠くとされる鉄道事故と、外傷力を欠くとされる腐った果実を食べたというケースについて、時間的連関と一つの要素を導入し、嘔吐症状が形成されうる過程を再構成する。まず適性を欠くという前者であるが、分析によって鉄道事故以前の記憶を遡り、もしそこに屍体目撃の体験という記憶が判明したとすれば、適性の条件は満たされ、嘔吐症状が形成されうるという。また外傷力を欠くという後者のケースにおいても、「腐った果実」を食べた体験よりも古い、たとえば「動物の屍骸」を見たという体験の記憶が甦ったとしたら、外傷力の条件は満たされ、症状が形成されうるという。外傷の事後性とも関わるようなこの時間的連関の再構成のなかで、我々はいずれの症例においてもその起源に「屍体」という要素が置かれたことに気づくだろう。Freud,S.自身の神経症(汽車恐怖症)の由来が亡霊目撃に帰されたように、ここでは神経症を形成する本質的要因(外傷)は、性よりも死(屍体)にあるかのように示唆されている。だが我々(聴衆)は、直後にこの期待を挫かれることになる。なぜなら、Freud,S.がこれらの症例は「創作」だと急に打ち明けるからである。もし単なる作り話(創作)だとしたら、我々がこれを検討する価値はなくなるのだろうか。

実は、この症例提示の仕方と類似した例が『グラディーヴァ論』(1907)の第三章に見られる。バセドウ病女性患者を投薬上の過失で死なせてしまったのではと自問するある医者の体験について、Freud,S.は章中で唐突に書き始める。その医者は、亡き患者と瓜二つの女性が診察室を訪れて、死者は本当に帰ってくるのだと慄然とする。だが、その女性は故人の姉であり、自身も同じ病だと明かす。バセドウ病患者がしばしば似た顔貌であるという事実と姉妹という要因から、医者は出来事の意味を理解し、恐怖から解放されたという。Freud,S.はこの逸話を記述した後、その医者は自分自身のことだと告白した。

自験例と言いつつ創作と明かす『ヒステリーの病因について』の講演と、他人の例と言いつつ自験例と告白する『グラディーヴァ論』の記述、二つの提示の仕方は対照的だが「自己の体験として直接語ること」の抵抗を共に示唆していないだろうか。Balmory,M.によれば、上述のヒステリー嘔吐症例は Freud,S.の創作ゆえにむしろ無意識と深く関与し、分析史的な意義を有するという。また講演のなかで症状の原因を死(屍骸)に定める一方で、その理論においては性に原因を帰属させる Freud,S.の転倒について、Balmory,M.は「彼の理論は性的外傷について語る。が、彼のあげる例は、死体について語るのだ」(Balmory1979: 岩崎訳 p.249)と述べる^{vii}。すなわち問題は、これらの夢・幼児期記憶・神経症理論の構築をめぐる解釈の方向性が示唆する、Freud,S.の屍体(死者)への抵抗にあると思われる。

言うなれば、Lanzer はこの屍体を Freud,S. に晒して見せた患者であった。だが分析家は、#23 の無気味な想念に対する解釈のように、死から性への焦点化を続ける。Lanzer が姉 Camilla の性器を見て性の違いに気付き(#17)、妹 Olga へ強引に迫った経験を語り(#20)、大便による性交の肛門幻想をも明かす過程で(#27)、Freud,S. は患者の「性愛の起源」が姉妹にあると推測し(#15)、実際に質問も投げている(#17)。姉の主治医 St(Steinberger)博士への死の願望と思考の全能を Lanzer が示唆した際、Freud,S. は全能感の起源として姉の死を推測した(#38)。また「剥製の鳥」の翼が動くという「人生最大の驚愕」の逸話が#42 で語られた際も、Freud,S. は姉の死をまずその体験と結びつけた(人間の屍体と動物の屍骸という創作症例の病因が、Lanzer の姉と剥製の鳥と重なる点も示唆的である)。しかし、死せる姉と剥製の鳥についても、Freud,S. は手淫と勃起という性愛の問題へ繋げた。つまり Lanzer の性愛の歴史を遡り、その古層に姉の死(屍体)が潜むことを Freud,S. は暗示しながら、しかしその解釈を常に死(屍体)ではなく性へと向けていく。我々はここに逆転移の起源としての、Freud,S. 自身の屍体への抵抗をみるのである。次節では、この屍体への抵抗と Lanzer の最も謎めいた症状とを繋ぐ主題を検討し、Freud,S. の解釈にみられるもう一つの特徴と合わせて追究する。

3. 屍体(死者)への負債感と金銭の負債感

Lanzer の最も不可解な症状は、鼻眼鏡の立替え金の返済に関する強迫であろう(#2,3)。彼は中尉が立替えたという代金の返済をめぐって奇妙な行動を繰り返す。Freud,S. はこの症状を、身分の低い少女よりも富裕な家系の養女を利得目当てに妻とした父親への同一視から来る、Lanzer の罪悪感(エディプス葛藤)と結びつけて解釈した。だが、『考察』の記述では、実際に代金を立替えた人物は郵便局の受付嬢とされており、ここから北山(2001)は、Lanzer の罪悪感をむしろ「女性に対する返済できない負債」として理解する視座を提起した。その女性こそ姉 Camilla である。Freud,S. の失念した「私の魂にかけて、あなたが死んだら、わたしも死ぬ」という彼女の言葉(#11)を、北山は「死の約束」と解し、「姉たちとの「死の約束」が不履行のままであり、それが患者の「返さねばならない借り」の起源を形づくっているのかもしれない」(北山 2001:74)と仮説を述べている。ここには死者への負債感と金銭の負債感を等価にみる思考が示されている。この仮説を支持する傍証を、我々は Freud,S. の次の著作に求めてみたい。

『レオナルド・ダ・ヴィンチの幼年期のある思い出』(1910)で Freud,S. は、Leonard が実母 Katharina の死に際して作成した埋葬費用計算書を引用している。そこには母の埋葬に掛った諸費用、蠟燭代、十字架運搬・建立費用、棺担ぎ人夫や僧侶らの人件費等の金額が子細に記載されている。Freud,S. によれば、この謎めいた計算書は強迫神経症を想定して初めて理解されるという。Leonard は幼年期に母へ性愛を固着させ、同性愛的性格を形成し弟子へその性愛を向けた。母が亡くなり、愛着と死者への憎悪は両価的感情をなし、Leonard はその神経症的葛藤の妥協的解決として、費用を惜しまず母を丁重に埋葬しながら諸費用を計算書へ細々と記入したのである。すなわちこの計算書は、一種の死者への当てつけであると同時に、Leonard の負債感という仕方で現れた悲哀表現に他ならない。

Leonard の埋葬費用計算書は、遺された人間の死者への罪悪感がまさに返しようのない金銭の負債感という仕方で強迫神経症的に表現された点で、Lanzer の支払い強迫と酷似しており、北山(2001)の仮説を支持するものである。Freud,S.が Lanzer の姉を匿名化した際の仮名が、Leonard の実母と同じ語源の Katherine だったのは単なる偶然だろうか。

この返し得ない負債感、Lanzer のねずみ譫妄をめぐる Freud,S.の解釈のあり方にも示唆されている。患者のねずみ譫妄は、肛門性愛に固有の欲動転換によって次の連想結合を形成した。すなわち、ねずみ(Ratten)は分割払い(Raten)であり、父の賭博狂(Spielratte)を介して金(Geld)であり、また糞便(Kot)、ペニス(Penis)、子ども(Kind)、そして Lanzer 自身や「死者の魂 der Seelen Vorstorbener」(GW7:434)とも等価であった。しかし、ここには一つ重要な肛門愛的対象が脱落している。それは贈り物(Geschenk)である。『性愛論三篇』(1905)で示唆され、『欲動転換、とくに肛門愛の欲動転換について』(1917)で図解的に体系化されたように、贈り物は肛門愛的対象の核である。糞便・ペニス・子どもの象徴的等価性において、糞便は子どもの最初の贈り物として機能する。糞便保持の快楽に固執して肛門期性格へ自己愛的に固着するか、それとも規則や両親の期待に従って排便し、愛着対象を犠牲にすることを受け入れる対象愛的選択をなすかは、人生最初の決断と見做される。糞便の贈与は男児においては去勢コンプレックスへ備える準備となり、女兒においてはペニス羨望と父を断念し、生まれ来る子どもへ性愛対象を移すモメントとなるだろう。

Lanzer は、自分の父親が死ねば贈与財産のおかげで結婚できると空想する一方で(#6)、財産の一切を母親に譲り、小遣いをもらう仕方で援助を受けていた(#12)。貴賤と貧富の差から父親が功利的に選んだ母親は、Lanzer にとって利得の象徴にしてかつ軽蔑すべき対象でもあった。彼が財産管理を母親に委ねたのは、逆説的だが母親から施しを受けたくないからであり、母親の金に穢れの観念を抱いていたからであった(#36)。「吝嗇」(#36)という彼の肛門期的性格は、金銭を贈ることができないということの裏返しなのである^{viii}。

要するに、鼻眼鏡の立替え金の返済という金銭の負債感に関わる Lanzer の強迫症状は、死者(姉)に対する返し得ない負債感という起源を示唆しながら、また贈与の不在と固く結びついていると言えよう。Lanzer のねずみ譫妄に対する、Freud,S.の解釈のあり方自身が、その贈与の不在という本質的な問題を端的に示唆しているのである。

さいごに

本稿は、ねずみ男の屍体に纏わる空想を検討し、死よりも性に焦点化する Freud,S.の解釈の方向性について、第一に屍体凌辱空想の記述に基づいて論じた。第二に Freud,S.の逆転移を検討し、Freud,S.における性の物語(夢・幼児期記憶・神経症論)の古層に屍体(死者)が蠢くこと、および性から死へ方向づけられる解釈と無意識的操作の反復を見出し、逆転移の起源としての屍体への抵抗という視点を論じた。そして第三に、金銭の負債感が強迫神経症者において死者(屍体)への負債感と密接に関わるという仮説を例証し、ねずみ譫妄に関する Freud,S.の解釈のあり方から、負債感と結びつく贈与の不在の問題を論じた。

Freud,S.はねずみ男症例の「裂け目」を認めていた。この裂け目には、死を迂回して性へと収斂していく Freud,S.の眼差しが注がれているのではないか。換言すれば、ねずみ男

の空想する屍体(死者)について、「何かが欠けている」という印象を与える仕方で、Freud,S. の解釈は「死を内奥に秘めた性」に対する欲望を露わにしていないか。この屍体凌辱空想に対する Freud,S. の解釈は、単に死を忌避したものではなく、『快感原則の彼岸』(1920)の「死の欲動」へと繋がっていく、性と死に関わる Freud,S. の思考の生成プロセスの一局面とさえ見做し得るだろう。その意味でも、Lanzer と Freud,S. のあいだで生まれたこの空想と解釈をめぐるドラマは、精神分析にとって理論的・歴史的な意義を有している。また屍体凌辱空想は一般に精神病理的な空想として否定的に扱われる傾向にあるが、ねずみ男の空想は病理学的な視点を遥かに超えた臨床的な射程と意義を持つ。ゆえに、この空想は貶下されるべき対象ではなく、豊饒な意味に溢れる生きた臨床素材であると言わねばならない。

最後に残された課題を二点述べたい。第一は、Freud,S. の解釈が死ではなく性へと方向づけられながらも、ねずみ男の分析が成功に導かれたというその臨床的意義についてである。この探究は、精神分析の臨床実践における性と死の意義を問い直す機会となるだろう。また屍体凌辱空想は、Lanzer という個人の心的過程を超えて、Freud,S. が『トーテムとタブー』で原始心性に還ったように、むしろ人類の系統発生的な心的過程や文化社会的な心性とも関わる問題であろう。したがって第二は、屍体のもつ精神分析的な意義について、心性史の文脈から「性愛^{エロディコニマカプ}=死骸趣味」の問題と絡めて別稿を改めて論じたい。

引用文献

Balmory,M. 1979 *L'homme aux statues, Freud et la faute cachée du père*, Bernard Grasset, Paris. 岩崎浩訳 1988 彫像の男—フロイトと父の隠された過ち. 哲学書房

Freud,S. 1900 *Die Traumdeutung*. G.W.II-III. 1-642

Freud,S. 1905 *Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie*, G.W.V. 27-145

Freud,S. 1909 *Bemerkungen über einen Fall von Zwangsneurose*, G.W.VII. 381-463

Freud,S. 1913 *Totem und Tabu*, G.W.IX

Freud,S. 1987 “Originalnotizen zu einen Fall von Zwangsneurose① Rattenmann ②” in *Gesammelte Werke Nachtragsband Texte aus den Jahren 1885-1938*, S.Fischer Verlag, 505-569. 北山修編監訳 高橋義人訳 2006 「ねずみ男」精神分析の記録. 人文書院

北山修 2001 フロイトと〈ねずみ男〉について. 精神分析理論と臨床. 誠信書房. 62-76

参考文献

Freud,S. 1896 *Zur Ätiologie der Hysterie*. G.W. I. 423-459

Freud,S. 1907 *Der Wahn und die Träume in W.Jensens “Grädiva”*. G.W.VII. 31-125

Freud,S. 1910 *Eine Kindheitserinnerung des Leonard da Vinci*, G.W.VIII. 127-211

Freud,S. 1915 *Triebe und Triebchicksale*, G.W.X. 209-232

Freud,S. 1917 *Über Triebumsetzungen, insbesondere der Analerotik*, G.W.X. 401-410

Freud,S. 1918 *Über infantile Sexualtheorien*, G.W.VII. 177-188

Freud,S. 1920 *Jenseits des Lustprinzips*, G.W.VIII. 1-69

Freud,S. 1987 *Brief an Wilhelm Fließ 1887-1904*, Fischer Verlag. 河田晃訳 2001 フロイト フリースへの手紙 1887-1904. 誠信書房

Gay,P. 1988 *Freud-A Life for Our Time*. W.W.Norton & Company. 鈴木晶訳 1997 フロイト I. みすず書房

Jones,E. 1961 *The Life and Work of Sigmund Freud*, Basic Books. 竹友安彦・藤井治彦訳 1969 フロイトの生涯. 紀伊國屋書店

Kanzer 1952 *The Transference Neurosis of the Rat Man*. In Kanzer,M & Glenn,J. 1980 *Freud and His Patients*. Jason Aronson

笠井仁 2006 フロイトと「ねずみ男」の治療. 北山修編監訳 高橋義人訳 2006 「ねずみ男」精神分析の記録. 人文書院. 163-175

Mahony,P.J. 1986 *Freud and the Rat Man*, New Haven: Yale University Press

Mahony,P.J. 2006 *Reading the Notes on the Rat Man Case: Freud's Own Obsessional Character and Mother Complex*. 笠井仁訳 症例ねずみ男の記録を読むーフロイト自身の強迫性格と母親コンプレックス. 精神分析研究. 51(1). 78-91

小此木啓吾 1977 精神分析的に見た強迫神経症ーフロイトとその後. 精神分析研究. 21(4). 25-41

Zetzel,E. 1966 *Additional notes upon a case of obsessional neurosis: Freud 1909*, Int.J. psychoanal, 47(2-3),123

註

-
- i Mahony,P.J.(2006)によると、当時の Freud,S.は、まだ強迫神経症の欲動病因論を肛門性愛に跡づけていなかった。なお当時の時代背景も含めた、本症例の精神分析史的意義については笠井(2006)を参照のこと。
- ii Lanzer の用いた「思考の全能 Allmacht der Gedanken」という言葉は、精神分析の術語の一つとなった。『トーテムとタブー』(1913)の第三論文で Freud,S.はこの術語が Lanzer に由来することを示唆している。
- iii 『考察』の註で Freud,S.は Lanzer の食養傾向にも触れている。『記録』では#27の「寝ている子どもの口に何かを入れる」との空想の記述中に、2歳になる弟が Lanzer の排泄物を食べたことがあると書かれている。
- iv 『欲動と欲動運命』(1915)で Freud,S.は、欲動の方向が能動性から受動性に転換される「対立物への逆転」という欲動運命の典型として、窃視症(覗き)と露出症を挙げ、その表裏一体性を論じている。Lanzer においても、覗きと露出は表裏一体の関係にある。Lanzer はメイドと家庭教師に性器を露出し(#20)、試験勉強に際して鏡に己の性器を映して眺めた(#39,42)。父の死後、鏡を介する露出は父の亡霊出現を期待する身ぶりに変奏された(#4)。この露出は、自慰の代替行為であり、かつ父親への面当てである。露出は去勢コンプレックスと関わり、自分のペニスが無傷で、女性の性器が欠けていることを認めない幼児的満足の反復に他ならない。なお Lanzer が思春期に手淫を自らに禁じたのは、自慰をすれば死ぬと信じていたからであり(#11)、Glejisaman の祈りは「自分の精液 Samen を、愛しい人の肉と一体化」(p81)させた、自慰の代替的行為であった(#22)。
- v 母親に対する憎悪は、小此木(1977)の指摘するように「口唇サディズム」の主題に通ずる。屍体を凌辱し、貪り喰う様から、そのカニバリズム的側面を見ることは容易い。すでに#33、#34にて母への憎悪の徴候は現れ、#37で母への同一化が強調される。また#43では「娼婦幻想」に母親への憎悪が示唆される。本稿は口唇性愛を無視するものではないが、屍体の考察に力点を置くため、「口唇サディズム」の考察は割愛する。
- vi Jones,E.(1961)は、これら二つの体験は Freud,S.によって重なって想起されたものと見做している。この見方に従えば、亡霊と母の裸体が圧縮され「屍体」を表象形成した可能性も否定できまい。
- vii Balmory,M.(1979)の論旨は、精神分析は Freud,S.の父 Jacob の殺人という過ちを隠蔽した上に築かれたとする仮説である。謎に包まれた Jacob の第2の妻 Rebecca について、Balmory はその死の隠蔽を Freud,S.の生活史や精神分析史の随所に見出しながら、この仮説の傍証として『ヒステリーの病因について』の Freud,S.の創作症例を挙げた。我々は Lanzer においても「父の過ち」が彼の神経症形成要因となった事実を想起したい。それは女性選択と金銭的負債に纏わる過ちであった。
- viii 恋人 Gisela が手術(『考察』では卵巣摘出手術)を受け(#46)、不妊症であった点も示唆的である。子どもを産めない(贈れない)女性を選択は、Mahony,P.J.(2006)も指摘するように Lanzer の肛門性愛の運命を標している。Freud,S.は『記録』では対象選択葛藤の源泉に姉と妹の選択葛藤をみたが、『考察』では貧しい少女が富裕な娘かという父の対象選択葛藤を継承した Lanzer の、婚約相手と従姉の対象選択葛藤に焦点を当てた。なお小此木(1977)は、Freud,S.自身のかつての対象選択葛藤を Lanzer への逆転移と関連づけて指摘している。

(心理臨床学講座 博士後期課程 2 回生)

(受稿 2012 年 9 月 3 日、改稿 2012 年 10 月 31 日、受理 2012 年 12 月 27 日)

A Consideration of the Fantasy of Violating Corpses in Rat Man Case and the Direction in Interpretation by Freud

TOMATSU Ryosuke

This paper explores the fantasy of violating corpses in Rat Man case, which Freud omitted from his case report and psychoanalytical records. We discuss this uncanny fantasy in terms of direction in Freud's interpretation. First, we consider how Freud describes this fantasy in his records, and show that Freud averts his glance from scenes of violating the corpse to the act of "gazing," and to infant sexuality. Second, we consider Freud's counter-transference to Rat Man, and ascend to Freud's anxious dream in his childhood, memories in his infancy, and his lecture on the cradle of his psychoanalytic theory. We can find corpses (the dead and ghosts) in these materials, and discuss Freud's own resistance to the corpse. Third, we consider Rat Man's main compulsive symptom concerning repayment that can never be done, and correlate it with the feeling of indebtedness to the dead (corpse). In one of his articles, "Leonard da Vinci," Freud quotes accounts of expenses for burial that Leonard documented when his mother died. These accounts are similar to Rat Man's symptom as a characteristic of compulsive neurosis. Also, we discuss Rat Man's anal erotic ideas about "rats," and show a lack in those ideas—that is "gift." This lack itself in Freud's interpretation expresses Rat Man's critical trouble. We conclude that Freud's interpretation always goes around death, and focuses on sexuality.